読売俳壇

矢島　渚男　選

鶴の湯の富士山仰ぎ御慶かな　福島市　引地こうじ

【評】私の町にもあった「鶴の湯」は銭湯によくある名前で懐かしい。壁面に描かれた富士山を眺めて初湯に浸りながら、知り合い同士が「おめでとう」の挨拶を交わしたもの。

初売りと初買ひ気合計りをり　葛城市　二上　三六

【評】「気合」が面白い。互いに相手の眼の色を窺い、頃合に値段が決まる。最近は河豚の袋鞴がよくテレビに出るが、それだろうか。コンピューターの現代は味気ない。

新しき下着をそろえ除夜の鐘　赤磐市　黒岩　博美

【評】家族みんなの新年の下着を畳んで揃え、ようやく除夜の鐘を聴いて眠る。どんな新年がくるのだろう。

道具箱担ぐ人生年の暮　高砂市　池田喜代持

孫が書く数字逆書き鵙日和　和歌山県　助野貴美子

白毫を恐る恐るに煤払ひ　柏　市　川浪　勉

弟子とらぬ仏師北窓塞ぎけり　栃木県　あらゐひとし

而してアフターコロナ忘年会　大分市　加藤　元二

水滴の音程を聴く夜寒かな　東京都　小林　洋子

初雪ににわか句心指折りぬ　佐野市　村野　則高

高野ムツオ　選

問へばただ今は昔と都鳥　東大阪市　木田　博幸

【評】在原業平になった気分で隅田川の都鳥に「名にし負はばいざ言問はむ」と問いかけたなら、「それはもうとっくの昔のことです」とつれない返事が来たという換骨奪胎の作。

二冊目の母子手帳受く冬日和　春日部市　相沢　明子

【評】二人目の子供が授かった幸福感に満ちている。冬日和の中、これからまた母と胎内の子どもだけの新しい月日が手帳に記されてゆく。

陽を見つめ星に目つむり冬木の芽　狭山市　小俣　敦美

【評】すっかり葉を落とした梢の無数の冬芽。一つ一つが、生まれたての赤子のようである。

右顧左眄するなと返り花ひとつ　神奈川県　中島やさか

処理水と噛んで含める冬の海　佐野市　高橋すみ子

菊人形夕日染込み色増せり　岡山市　押目　光世

冬空の青し他郷に母焼いて　大阪市　今井　文雄

バレリーナ始めましたと落葉かな　塩尻市　神戸　千寛

木枯しや画鋲ばかりの告知板　泉佐野市　高松　良子

だとしてもそれはそれとし日向ぼこ　南九州市　日笠こうじ

正木ゆう子　選

十二月戦禍逃れるロバ静か　流山市　大高　弘照

【評】クリスマスも新しい年も来るというのに、最低限の荷物をロバに積んで、住み慣れた土地から逃れる。何も知らず、いつものように静かな目をした平和なロバ。人間だけが…。

鬼柚子をながむるばかり十日ほど　東京都　寺岡芙聖子

【評】わが家でも戴き、食べられないわけではないらしいが、あまりの大きさに恐れをなして、眺めていた。文旦の仲間と聞けば、なるほど。

稲屑火のけむり遠近阿蘇の底　福岡市　後藤　啓之

【評】「いなしび」は、刈り取った後の藁屑や株を焼くことだそうで、初めて知った。瑞穂の国の住民としては知っておきたい美しい言葉だ。

一升を一日かけて柚子しぼり　京都府　山田　国雄

牡蠣蕎麦のつゆ牡蠣色に濁りけり　東京都　森　一平

経済を動かすつもりコート買ふ　千葉市　森田千代子

竹切りの道具小脇に霜の径　熊谷市　馬場　国夫

大方は思い過ごしや冬桜　名古屋市　渡辺　淳子

縫ひ疲れ庭に出づれば時雨雲　和泉市　山崎　文恵

いつか見し南天の花けふは実に　東京都　中村　厚郎

小澤　實　選

ストーブに灯油補充の父在りし　名古屋市　徳広　光恵

【評】石油ストーブの灯油が減ると、かならず父が補充してくれた。ストーブを見ると、父のことを思い出すのだ。「在りし」と過去の助動詞である。父は世を去っていよう。

冬晴や水上バスの水しぶき　前橋市　山本　亨

【評】冬晴の一日、水上バスに乗って、大河をさかのぼっているか。水しぶきによって乗っていることがわかる。スピードもかなり出ている。

どんどの火消したる夜のバケツリレー　小諸市　藤　雪陽

【評】大きく上がったどんどの火を、楽しんだみんなで消す。小川か池からバケツで水を汲み、リレーで火まで運び、しっかりと消す。

取り敢へず床屋に行かう年用意　入間市　松原　正憲

調律の黒鍵連打十二月　流山市　高橋　郁代

欠けし翅をさめきれずに冬の蠅　浜松市　野畑　明子

寒鰤の尾を持ちずんずんと帰る　伊勢市　藤田ゆきまち

県道のうどん自販機月冴ゆる　春日部市　桜井　俊治

酔李白欲しがりさうな寒の月　茅ヶ崎市　西岡　青波

夫選ぶ小さく甘き蜜柑かな　川口市　莚田　陽子

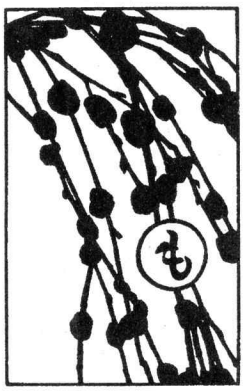
まず土地に杭を打ち込むようにして二人暮らしにたてる歯ブラシ　越谷市　あきやま

【評】暮らしの基本は、歯磨きのような日常だ。週末デートに花を飾るのとは違う。同棲を始める時のウキウキ感だけではなく、地味な覚悟が伝わってくるのがいい。基礎工事を思わせる「土地に杭」が人生の土台をしっかり作ろうという気概とともに、歯ブラシの形状とも響きあい、うまい比喩になっている。（俳万智）

年間賞　短歌②

戦地でも患者を見捨てない人へ遠くの地から逃げよと言った　泉大津市　のぶつばき

【評】昨年は、何かの箍が外れたように各地に紛争・戦争が広がりました。SNSの発達により戦地からの声がダイレクトに届く現代です。そんな時代に、受難する人々とどのように連帯するか。自らの意志で戦地に留まる人達にいかなる声をかけうるか。誰もが当事者となる現実を抉る一首です。（黒瀬珂瀾）



題字デザイン・イラスト　福田美蘭